［書評論文］

書評：ジンメル「カントの義務論と幸福論」

――ソーシャル・ウェルビーイング調査への応用――

矢崎　慶太郎 *

本論の目的は，社会学者ゲオルク・ジンメルの幸福についての論文を簡素に要約し，その理論をソーシャル・ウェルビーイング調査結果のなかに位置づけることである．

まずジンメルおよびカントの幸福論は，幸福／道徳は一致しないことを前提にしており，この点で，幸福＝道徳は一致するとするアダム・スミスの幸福論とは異なる流れのなかに位置づけられるものであることを指摘する．次に両者の幸福論の違いは，哲学的・理論的な前提からではなく，当時の研究者が置かれていた社会状況から導出されるものであることを指摘し，専修大学ソーシャル・ウェルビーイング研究センターが行った「ライフスタイルと価値観に関する国際比較調査」から日本と韓国の調査結果を参照・比較し，それぞれの社会がジンメル型とスミス型のどちらに近いものであるかを検証する．

その結果，日本社会は個人の幸福が全体の幸福と一致しづらく，ジンメル型の理論モデルに比較的適合しているのに対して，韓国社会は日本と比べると，個人の幸福と全体の幸福が一致しやすく，スミス型の理論モデルに適合しやすいことがわかった．

キーワード：主観的幸福，客観的幸福，道徳

1　はじめに

近年，幸福への関心が様々な学問分野で大きな広がりを見せつつなか，社会学がこの分野へと貢献するにあたり，その古典はそもそも幸福をどのように捉えてい

* 専修大学ソーシャル・ウェルビーイング研究センター　kei.yzk.15@gmail.com

たのかを知ることは重要である．そこで 1903 年に発表された社会学者ジンメルの論考「カントと幸福論と義務論（Die Lehre Kants von Pflicht und Glück）」を翻訳した．

2　ジンメルによるカントの幸福論

この論考は一見すると極めて哲学的であるように見えるが，その内容はカントの幸福哲学をジンメルの社会学的な見地から裏づけるというものであり，社会学的にも極めて重要な論考であると考えられる．ジンメルはこの論文において哲学者カントを前提にしながら，幸福を主観的幸福として，義務や道徳を客観的な幸福として分類し，前近代社会においては人びとの主観的幸福が社会全体の客観的幸福（道徳）に一致しやすいのに対して，近代社会においては，両者が分離していくことを指摘している．

ジンメルによると，前近代社会，つまり人口規模が少ない社会（村や古代都市国家）においては，顔の見える人たち同士のあいだで集団内部の連帯が極めて強いために，富や安全保障といった全体の利益が個人の利益と容易に一致することができた．これに対して，人口規模が増大する社会（都市化した近代社会）においては，直接会うことのない人たちのあいだで共通の価値観やライフスタイルは維持できなくなり，それらは多様化していく．そのため，もはや個人の幸福と全体の幸福は一致しなくなるのである．このような社会においては，いくら個人が幸福を追求しても，それが全体の幸福へとつながることにはならないし，あるいはその逆に，いくら全体の幸福を追求してもそれが個人の幸福を生むとは限らなくなる．

多様化した近代社会にあっては，個人の幸福は，いかに全体に利益をもたらすか，どのような道徳的価値を持っているかという基準からは離れていく．他方で，道徳それ自体も，個人をどれだけ幸福にするかという基準からではなく，道徳それ自体が積み重ねてきた議論のなかで正当化されるようになる．したがって，幸福と道徳は一致しなくなり，それぞれ異なる原理によって作動する自律的な領域となるのである．

幸福と道徳が一致しないことは，ジンメルが述べているように確かに社会に「悪徳」をもたらすこともある．なぜなら個人の幸福は，悪い行い（例えばドラッグの使用）によってもますます価値づけられるかもしれないからだ．しかし必ずしもこのことによって道徳が退廃して無秩序が到来するわけでもない．道徳が個人を幸福にするか否かとは関わりなしに正当化されるということは，個人の幸福という制約を超えてより広範囲に道徳を展開できるようになることをも意味するからである．

例えば，全く会ったこともなく見たこともない地球の裏側にいる人たちの抱える貧困や格差問題にまで意識を高めることができるようになるのも，彼にとっては道徳が個人の幸福とは分離して価値を有するからなのである．

いずれにしてもジンメルにとって近代社会は，様々な価値領域が「分化（Differenzierung）」していく社会であり，この傾向はたんに社会制度のような客観的な水準だけでなく，個人の幸福という主観的な領域にさえ広く及ぶのである．

3　アダム・スミスの幸福論

このようなジンメルの幸福論が，古代ギリシア哲学から脈々と続く伝統的な幸福主義（Eudaimonia）や，あるいはとくにアダム・スミスを中心とするスコットランドの道徳哲学の幸福論とは趣を異にしているのは明らかである．ジンメルと違ってアダム・スミスは，個人の幸福と全体の幸福とが結びつく特別な条件があると信じていた．それは「共感（sympathy）」である．宗教的制約のなくなった近代社会において個人は，確かにもっぱら利己的に自らの幸福だけを追求しようとする．しかし同時に人々は，他者に認められ共感を得たいという欲望をも持っているため，利他的な（つまり道徳的な）行いをすることが利己的な個人の欲望の対象にもなりうる（Büschges 1997）．それゆえ幸福と道徳とは，人びとが共感を得るために行為するという条件下において一致するのである．つまり，自分とは直接関わりのない世界の貧困や格差問題について関心を持ち手助けすることは，自分自身が他者に認められ賞賛されたいという利己的な欲望によって突き動かされるゆえに，個人の幸福と全体の幸福は一致するということになる．

今日の幸福研究が一般的に言って，ジンメルとスミスの見解のどちらに近いかということを考えれば，圧倒的にそれは後者であろう．なぜなら幸福研究者の多くは，多かれ少なかれ主観的な幸福と客観的な幸福とは一致しうるということを想定しているし，両者が一致しないのなら個人の幸福を研究する価値は減少するからである．なかでもとくにソーシャル・キャピタルの議論は，スミスの言う「共感」の原理を計測可能にしたものであると言ってよい（Robinson et al. 2002）．人々との共感を媒介にしたネットワークが，あたかも「資本」のように大きな社会的影響力を発揮し，とくにパットナムが強調したように，社会全体の利益をも向上させるのである．さらにソーシャル・キャピタルの議論は，近代化と幸福との関係についても，ジンメルとは全く異なる前提を置いている．すなわち，パットナムによれば，近代的な社会ほど，個人の幸福と客観的・全体的な幸福は一致しやすく，非常に広い範囲の人々

に対する一般的な信頼が個人の幸福を向上させる（Putnam 1993）.

4　調査結果からの位置づけ

しかしスミスの共感理論とジンメルの分化理論のどちらのアプローチが正しいかは，哲学や社会学理論からだけで導出できるものではない．両者が見ている社会が異なれば，必然的にその分析アプローチも異なるということがありうるからである．

実際，カント哲学に基づいて幸福と道徳を分離させようとするジンメル理論は，カントが直面していた当時のドイツ社会を考察することなしには考えられないものであろう．すでに指摘されているように，カントが生きた 18 世紀末のドイツ啓蒙専制君主たちは，国民に（おしつけがましく）幸福を提供することで自らの権力の正当性を確保しようとした．その際多くの後期啓蒙主義者たちは，国家が個人の幸福を把握できるという考えに対して直接抗議しないまでも極めて懐疑的であった．だからこそ個人の幸福は（国家が把握可能な）全体の幸福に還元されてはならないものであったのである（Pankoke 1997）．実際，ジンメルもこの論考において，全体的な幸福（道徳）と個人の幸福を結びつけることは，「我々の存在の外部にある権力に組み込まれる」可能性があることを指摘している．カントにもジンメルにも通底するのは，個人の幸福を全体の幸福として結びつけようとする国家への不信である．この点こそが早い段階で民主主義文化を成立させたイギリスとは異なる社会状況であり，それを考慮することなしにジンメルの幸福論を理解することはできないであろう．

したがってカント，ジンメル／スミスのどちらのアプローチを用いるかを考える前に，分析対象とする社会において，個人の幸福が全体の幸福とどの程度一致しているのかを経験的に確認することは極めて重要であろう．

ここでは専修大学ソーシャル・ウェルビーイング研究センターによる「ライフスタイルと価値観に関する国際比較調査」から，日本社会と韓国社会においてどのような要因が幸福度に影響をあたえるのかを，重回帰分析を行いごく簡単に比較してみたい．

以下の図 1 と図 2 は，日本と韓国において主観的幸福度を従属変数とし，独立変数として，結婚（ダミー），世帯収入，信頼度（家族，友人・知人，近所の人びと，公務員，ほとんどの人，見知らぬ人），地域活動（街づくり活動，町内会）参加頻度を投入した．また統制変数としては，性別，年齢，就業形態（正社員，非正規，自営，無業・失業），学歴（大卒）を投入した．なお，グラフの数値は，標準化係数であり，

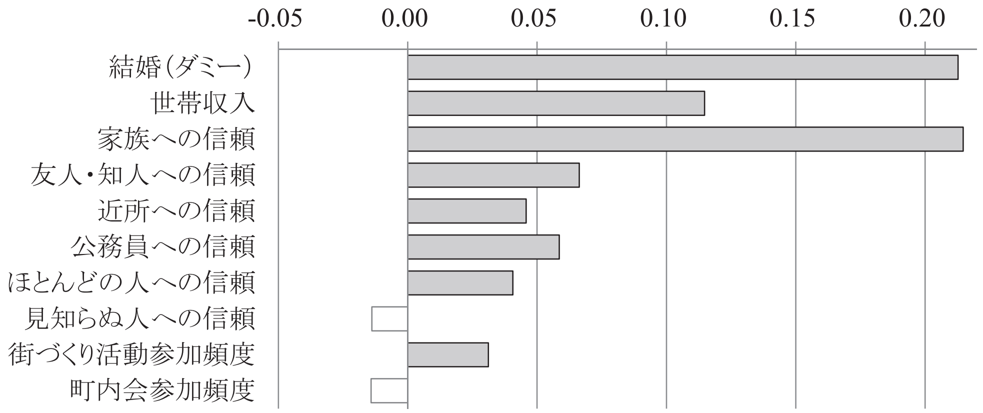

図1　日本における主観的幸福度を従属変数とした重回帰分析（n=10,106）

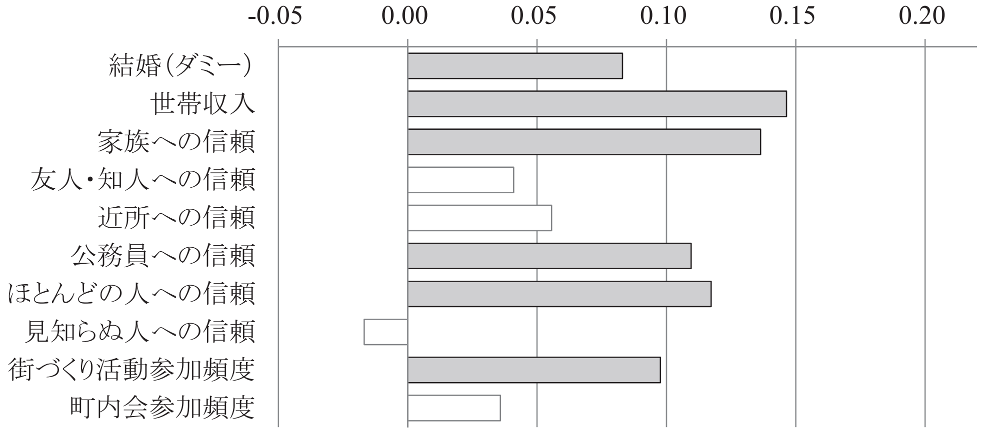

図2　韓国における主観的幸福度を従属変数とした重回帰分析（n=1,951）

また有意な係数をグレーの棒で，有意でない係数を白い中抜きの棒で表示した．

まず図1（日本）と図2（韓国）を眺めてみると，両者ともに共通しているのは収入や家族への信頼関係，結婚の有無と言った極めてプライベートな領域に対する価値観が個人の主観的幸福度に大きな影響を与えているという点である．それに対して，より広い範囲の人間関係に関わる変数に関しては，日本と韓国ではその傾向の違いを確認することができる．

日本（図1）においては，プライベートな領域での人間関係は主観的幸福度に強い影響を持つ傾向にあるのと比較すると，広範囲な社会関係はそれほど直接的に個人の幸福に影響しない傾向にある．ほとんどの人や公務員への信頼は有意に主観的幸

福度に正の効果を持つものの，その係数の高さは軽微なものにとどまる．さらに地域活動への参加頻度が与える効果に関しても，街づくり活動に関しては有意な効果が確認されたが，やはりその効果の度合いはプライベートな領域と比べると低く，また町内会活動については有意差を確認できなかった．

それに対して韓国（図 2）では，広範囲な社会関係に対する信頼は，家族のようなプライベートな関係に対する信頼と同様に個人の主観的幸福度に強い影響を持っていることがわかる．公務員やほとんどの人への信頼がもつ効果の度合いは，確かに家族への信頼よりは若干与える影響が低いものの，日本に比べれば遥かに高い．見知らぬ人への信頼は日本と同様に有意な効果を持たないものの，街づくり活動の参加頻度が個人の幸福に与える効果は日本のケースよりも遥かに安定している．日本ではもっぱらプライベートな関係が幸福度に影響するのに対して，韓国では行政システムやほとんどの人への信頼のようにより抽象的，広範囲な関係も強く影響していることがわかる．

ジンメルが提示した幸福と道徳の一致／分離という問題意識を改めて考慮に入れると，あくまで比較上の話ではあるものの日本と韓国の社会における差異は明らかである．日本社会は個人の主観的幸福度に影響を与えるのは私的な領域に限られ，より社会的な領域での効果は弱く，この意味で幸福と道徳とは分離する傾向にある．それに対して，韓国社会は，私的な領域も社会的な領域も共に主観的幸福度を高めるという点で，幸福と道徳は日本との比較においては一致する傾向にあると言うことができる．

5　おわりに

以上本論では，社会学者ゲオルク・ジンメルの幸福論についての論考を要約しながら，幸福／道徳の分離を説くジンメルの幸福論を，両者の一致を前提とするアダム・スミスの幸福論との対比から明らかにしてきた．

そしてジンメルの幸福論が実際の調査結果にどれだけ当てはまるのかについて，ソーシャル・ウェルビーイング調査の結果から検討した．その結果，日本調査の結果は，韓国の調査結果と比較すると，家族関係等の私的な領域が個人の幸福に結びつきやすいものの，一般の人びと全般や地域活動等，公的な領域に属する人間関係や社会活動は，個人の幸福にそれほど効果を持たない傾向にあることがわかった．この結果は，個人の利益と全体の利益とが結びつきにくい可能性を示唆しており，この意味では両者の分離を前提とするジンメルの理論モデルが適合する．それとは

逆に，韓国調査においては，私的な領域も公的な領域もともに個人の幸福に安定した効果を持っている．この分析結果は，日本に比べて個人の利益と全体の利益が一致しやすい可能性を示唆しており，両者の一致を前提とするスミスのモデルが適合する．

幸福と道徳の一致を前提としたスミスの理論モデルは，今日ではソーシャル・キャピタル理論にも継承され，幸福研究においても中心的な役割を果たしている．とはいえ，両者の分離を想定するジンメルの幸福理論も，対象とする社会の状況によってはいまだに高い説明力を保持している．そのため，ジンメルの幸福についての論考は今でも幸福研究にとって重要性を失っていないと考えられる．

［付記］　本研究は平成26〜30年度文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 S1491003 の助成を受けたものです．「ライフスタイルと価値観に関する国際比較調査」は，アジアにおけるソーシャル・ウェルビーイング研究コンソーシアムの協力を得て，専修大学社会知性開発研究センター／ソーシャル・ウェルビーイング研究センター（研究代表・原田博夫経済学部教授）が設計・実施したものです．

［文献］

Büschges, Günter, 1997, „Selbstliebe, Glück und Solidartät: The Pursuit of Happiness bei den Schottischen Moralphilosophen," Alfred Bellebaum und Klaus Barheier Hrsg., *Glückvorstellungen: Ein Rückgriff in die Gescheichte der Soziologie*, Opladen: Westdeutscher Verlag, 19-31.

Pankoke, Eckart, 1997, „Modernität des Glückes zwischen Spätaufklärung und Frühsozialismus," Alfred Bellebaum und Klaus Barheier Hrsg., *Glückvorstellungen: Ein Rückgriff in die Gescheichte der Soziologie*, Opladen: Westdeutscher Verlag, 75-105.

Putnam, Robert, 1993, *Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton: Princeton University Press.（＝ 2001，河田潤一訳『哲学する民主主義：伝統と改革の市民的構造』NTT 出版.）

Robinson, J. Lindon, A. Allan Schmid and Marcelo E. Siles, 2002, "Is Social Capital Really Capital?" *Review of Social Economy*, 60(1):1-21, (Retrieved December 15, 2017, http://www.jstor.org/stable/29770138).

Simmel, Georg, 1903, „Die Lehre Kants von Pflicht und Glück", Max Henning Hrsg., *Das freie Wort: Frankfurter Halbmonatsschrift für Fortschritt auf allen Gebieten des geistigen Lebens*, 3(14): 548-53.（＝2018，矢崎慶太郎・中林練訳「カントの義務論と幸福論」『ソーシャル・ウェルビーイング研究論集』4: 73-9 .）

Simmel's Sociology of Happiness and Moral:
Application to the Social Well-Being Survey

Keitaro Yazaki
Senshu University
kei.yzk.15@gmail.com

This paper summarizes Georg Simmel's article, "Kant's Teaching about Duty and Happiness" (Die Lehre Kants von Pflicht und Glück), and applies his theory to results of the Social Well-Being Survey.

The happiness theories of Kant and Simmel suppose a conflict between happiness and moral. They contrast strongly with the theory of Adam Smith who believes a harmony between them. Such difference is occurred not only in their philosophical backgrounds, but also in their social milieus, as Simmel suggested.

Based on his view, we test the effects of both private and public factors on individual well-being from the survey results of Japan and South Korea, using OLS regression. The analysis showed that in Japan private factors have a stronger effect on happiness than public ones, while in South Korea difference between them is relatively smaller than in Japan. This result suggests that Japanese society is in accordance with Simmel's model of happiness and South Korean society is matching with Smith's model.

Keywords: subjective well-being, objective well-being, moral